

はあらざるべきか。况んや、近來先覺者の美しさ
聲、漸く都鄙に遍きを、豈、至誠熱情の士に乏しか
らんや。唯、その機を得ざるのみ。一旦、機を得て、
その力を一にするを得んか。大任を受くるの日、豈
遠きにあらざるべし。吾人小なりと雖も、微なりと
雖も、至誠天に通ずの言を信じ、且つ、世の至大な
ものは、至微の積集なるを知る。希くは克已奮勵。
己れ先づ、本然の自己に歸り、吾等が、未來の教へ
子をして、正しき信念の上に立ち、至誠朴直、眞の
人間たるに幾からしめば、或は、その職を恥かしむ
ること少なきを得んか。

吾人、法華經に於ける、不惜身命の意を知らず。
且つ、われらは、つゆ風流を解せざるもの、固より
文をなさざれども、日夜遲々として、一步も進み得
ざるに恥ぢ、且つ、將來の重任を思ひては、世にも
心よわき我が身を悲しみて、諸賢の御教示を仰がん
と、唯、至誠以てこれを草するなん。

富川長橋

(龍雲山莊十小記之二)

細田劍堂

富士河沿岳麓。洋々入海。兩岸數里。
不辨牛馬。稍上。鐵橋架焉。長一萬八
千尺。蜿蜒如龍。草堂望之。近在目睫。
長橋臥波。未雲何龍。於今知此句之
妙。

駿海濤聲

(全 上)

覽古亭下。駿海渺然。田子三保諸勝。
百里一目。夜深人定。濤聲與松聲相
和。颶颶輕響。如琴如雷。使三人發羈愁。

そう云ふ時は、實に、たよりない、かなしさ、さび
しさをじみ、と味はふ。

断

M.

L.

私達が、この世の中に生きてゆく以上、すべての
事は、なる様にしかならない、併し、自分としては、
そこでも、そうする、といふのでなければならぬ
い。自分がしないで居て、なり様筈がない。もし、
自分がしないでも、どうにかなると云ふ事があると
すれば、それは、きっと、だれかトどうにかするか
らなるのである。すべての人が、どうにかなる、と
いつて眼をつぶつて居たら、社會の活動と云ふ活動
は、ことごとく、停止するより外あるまい。

たゞ、その結果は同じであらうとも、たゞ、な
る様になつたのと、自分がしてなつのとは、そこに
大きな相異がある。

私達は、自分を知り、自分を考へた時、はじめて、
ほんとうに、生活する事が出來るのではなからう
か。私達が、自分と云ふ事を忘れて居る時位、たや
すく言ひ、たやすく行ひ得る時はない。そして、た
ゞへそれが、いかに美しく、いかに立派であらうと
も、そこに、何ら生きた力を認める事は出來ない。
ともすれば、自分を忘れ易い私達は、その忘れた
自分の爲めに、自分をうらぎられる事がまゝある。

たゞ、なるにまかせた生活は、他人から見てどん
なによくとも、その底を流れる生命の力がない、ど
うして、その様な生活から、眞の満足や、安心を得
る事が出來やう。常に、自分からすると云ふ、自覺
をもつて生活する時、はじめて力強いよろこびを感じ

じる。つまり、外的には、なる様にしかならない様に見える生活でも、内的にはどこまでも、自分がするのでなければならない。

□

私達は、どうかして、自分の氣にそまない事があると、その人なり、なになりて、一途に、腹を立てたり、氣持を悪くしたりする。これは、私達がともすれば、自他を混同するからである。けれどもそう云ふ時に限つて、その原因が、むかうにあるのでなくて、却つて自分が至らないからであると云ふ事にきづかないで居る。

自分の生活と、他の生活とを判然區別する事が出来る様になつた時、はじめて、他に對して、平靜である事が出来また、積極的に生きる事も出来る様になる。

□

私達は、自分を考へ、自分を知る以上、自分として、行くべき路、進むべき方向も、自然、明らかになる筈である。

けれども、周囲の事情は、決して、そう單純に、

併し、理想を實現する、第一歩として、ひとまづ、事情に即すると云ふ事は、一層、意味の深い事であり、又、實際、世の中へ出てからの、大切な處世法であつて、唯、一途に自我を徹底させ様とする單純さに比べて、はるかに、複雑な意味の徹底である、と言はれた。

いかにも單純な考へに捕はれて、我と苦しみもがいて居た私は、この言葉によつて、やうやく、多少の落ちつき場所を見出す事が出來た。けれども、なほ時々、この様にして、すゝんで行く私の生活は、だん／＼消極的になるのではないかしらとおそれたり、それは、餘りに遠まはりではなからうかと云ふ疑が起りかけたりするのを、どうする事も出來ない。

□

私達は、よく、可愛想だとか、きの毒だとか言ふ。そして、あたりまへ、これは同情と言はれて居る。けれども、多くの場合に、それが、果して眞の同情であるか、どうかは疑はしい。なぜならば、眞の同情は、理解によつてはじめて生ずべきものである故。

あたりまへ、つかはれて居る、同情と云ふ語は、かならずしも、この意味の同情ばかりではないらしい。むしろ、單に、氣の毒とか、可愛想とか云ふ、ごく皮層な、常識的の語に用ゐられる事が多い。かういふ意味での同情は、唯、その本人一人の主觀から起つたもので、先方との間に、すこしも、精神的の交渉がない。そればかりでなく、却つて、無暗に、きのぞくとか、可愛想とか思はれるのを、かたはらいたくも、迷惑にも思ふ人があるかも知れない。又、そうした、いゝかげんな同情の爲めに、あたら、一人代なしにしてしまふ事があるかも知れない。それ故、當人は、同情のつもりで居ても、先方に取つては、かならずしも、同情でなくて、却つて、迷惑にさへ思はれるかも知れない。

唯、眞の理解から生ずる同情だけが、ほんとうの意味の血もあり熱もある同情であると言ふことが出来る。

その通りにさせてはくれない。もし、その路を、まつすぐに、進んで行く事の出來る人があるならば、その人は、ほんとうに、幸福な人である。周囲の事情の爲めに、義理つくや、人情づくて、右にも、左にも行く事が出來ず、あちらに引かれ、こちらに引かれして、結局、うごきのとれなくなつたほど、氣の毒なことはない。

□

理想と、現實との矛盾、衝突の余りにはげしい生活に、堪へきれなくなつた私は、完全な調和をはかることの、永久に不可能らしく見える。理想と、現實の間に立つて、自分の生活をどうすればよいかに、全く、迷つてしまつた時、或る、先生は、事情に即する事は出來ないか、と言はれた。以前からたゞへ、一時なりとも、事情の爲めに、自分をまげて、理想をしてると云ふ様なことは、不徹底なことを肯がふ事が出來なかつた。

先生は、かさねて、勿論、無節操、無自覺に、唯、事情の爲に左右されるのは、不徹底かも知れない。